第二五回 家族ぐるみ図書館利用

山田　寛

アジ研図書館は、市谷時代も利用させていただいた。私は読売新聞記者で一九七〇年代～九〇年代、サイゴン、バンコクなど海外四カ所に駐在したが、その合間や二〇〇一年に定年退職するまで調査研究部門にいた時期、東南アジアを重点に情勢フォローを続けた。だから、市谷にもお邪魔し、勉強させてもらった。

だが、図書館のかなりの〝おなじみさん〟になれたのは、アジ研が私の自宅から車で約一〇分の海浜幕張に移転し、私も大学教員に転じてからだ。国際問題を講義し、アジア、アフリカの問題を多く取り上げた。傍ら、カンボジアのポル・ポト革命や第二次大戦後北朝鮮に残された日本人や、日本の難民受け入れ問題などについて調査し、本を書いた。わかる外国語は英語、仏語だけだし、広く浅い研究だが……。

大学は、二〇〇八年から非常勤になったが、現在、法務省の難民審査参与員をし、少しだが講演をし、記事も書いている。アジ研図書館は、そんな私のダボハゼ的活動を支えてくれてきた。

講義や講演では、世界の女性や子どもの問題を扱うことが多い。女子教育の闘士で、二〇一二年一〇月、イスラム過激派「タリバン」に襲撃され、九死に一生を得たパキスタンの少女マララもよく取り上げた。地元への影響も知りたくて、パキスタンの新聞・雑誌に目を通した。

地元住民は、タリバンの怖さを改めて思い知らされた。事件後、地元の国立女子大学の学生たちがデモをした。政府がこの大学を「マララ・ユスフザイ女子大学」に改名したことへの抗議デモだった。学生たちはマララの写真を破り、校名を元に戻せと要求した。「マララを記念する学校に通って、生命を脅かされるのは私たちだ」。こうした側面ニュースもフォローできた。

同年一二月、「女子学生レイプ殺人事件と怒りの大デモ」がインド・デリーをゆるがせた。二三歳の女子学生が夜、バスのなかで六人組に乱暴され、車外に投げ出され死亡した。それに対し激しい抗議デモが起きた。女性への暴力がのさばる社会への強烈な異議申立て。政府もマスコミも、大きな衝撃を受け、刑を厳しくし、「女性尊重」を呼びかけた。だが、その後もインドのレイプは減らない。そんな動きも、アジ研図書館でチェックできた。

カンボジアでは、ポル・ポト派を裁く特別法廷が続いている。内戦と革命の後遺症、女性や子どもの苦難、開発と貧困、親中国に傾くフン・セン政権の動向などウォッチしたいことが多いから、カンボジアの英字紙や英文月刊誌は、ひんぱんにコピーさせてもらっている。

大学の教室では、パワーポイントで関連写真をみせることが欠かせない。だから、もちろん著作権に注意しながらだが、現地語の新聞雑誌も、使える写真が載っていればコピーする。

難民審査に関していえば、いま日本で難民申請数の多いのは、トルコ、ネパール、ミャンマー、スリランカ、パキスタン人の順だ。

参与員は、法曹関係者、大学教授、元大使、NGO役員など様々だが、私は元国際報道人として委嘱された。そこで審査の面談でも、人一倍現地の最新事情を事前に仕込んでおく責任があると思うから、現地ニュースのチェックは欠かせない。

実は、私の家で、アジ研図書館に縁があるのは私だけではない。

娘は、会社勤めをし、今赤ん坊も含めて二女を育てながら、女性労働に関する博士論文に取り組んでいる。神奈川在住だが実家に来るたび、アジ研図書館に足を運ぶ。長女出産前の臨月の時もお世話になった。娘婿も、以前中国に在勤し、今はある国家資格取得試験を目指して猛勉強中で、来館者に加わった。そして私の妻も、時たま現代史関係の和書にふれるぐらいだが、利用者の末端にいる。こうして、一等でなく三等船室の客だろうが、一家そろってアジ研図書館丸に乗船させていただいている。

日本にとって、アジア諸国との関係の重要性は、増す一方だろう。アジアに関心を持つ青少年がもっと増えてほしい。アジ研図書館の主催で、地域の学校と協力し、「アジアがわかる集い」とか、「アジアの文化と本を知る課外授業」などができないだろうか。将来の図書館利用拡大への土台作りにもなる、と思うのだ。

（やまだ　ひろし／元嘉悦大学教授）